

ふるさと見て歩き

第12回

いんようさん
陰陽山



◀昭和7年の祭礼において野上の鹿島貞氏が着用した殿様装束
(歴史民俗資料館山方館蔵)

山方地域には江戸時代から庶民の信仰を集める陰陽山があり、現在は森林公園として親しまれています。また山頂に祀られている陰陽神社は縁結びの神様として知られています。

◇陰陽神社と祭礼

幕末にまとめられた記録によれば、寛文元(一六六一)年、光圀が領内の巡視の際、一里(約四km)南の上大賀村(市内上大賀)から山頂の二つの巨岩「夫婦岩」を望み、その眺めに感動して神社の創建を思い立ったと言われています。

しかし、この山はもともと小口家の持ち山で氏神を祀っていたため、小口氏には代替地として山林が与えられました。その三十年後の元禄三年に再び

光圀はこの地を訪れ、その際「夫婦岩」を「陰陽石」と改め、また神社の縁起を作り「陰陽神社」として再興したのではないかと考えられています。

昭和初期までは二年おきに祭礼が行われ、「浜降り」といって、神輿に乗せた御神体(はまおろ)を神奉地河原(市内山方)に渡御させていました。氏子となつている地区ではそれぞれ、風流物と呼ばれる山車を出す地区、踊り屋台を出す地区、花火を打ち上げる地区など受け持ちがありました。火消し行列とそれを率いる殿様は野上地区と和田・大久保地区が交代で出すことに決まっていました。昭和初期に使用された殿様装束は現在でも二着残されており、歴史民俗資料館山方館で展示しています。

しかし、残念ながらその祭礼は昭和十二年を最後に途絶えてしまっています。

◇陰陽山を歩いてみよう

実際に陰陽山森林公園から山頂まで歩いてみましょう。参道の石段を登り一つ目の鳥居をくぐると、その奥からは杉の木などが生い茂る御神域の森が広がります。

陰陽神社本殿へ続く石段の手前にも鳥居があります。この簡素な石造りの鳥居に掛かる「陰陽山」という小ぶりの扁額は、光圀の字を彫つたものといわれています。独特な字体が刻まれていますので目をこらしてみてください。

この石段を登ると「幣殿(へいだ)」に辿りつきます。この石鳥居と幣殿は、昭和二年に山方村初老会が再建したものであることが石碑からわかります。幣殿を過ぎるともうすぐ山頂です。山頂の標高は二一六メートルで、ふもとから十分ほどでたどり着きます。

光圀がはるか遠くから望んだという陽石・陰石はおよそ十メートルの高さを誇ります。そしてこの巨岩のふもとに陰陽神社の本殿があります。現在は彩色も落ちてしまいましたが、社殿の彫り物は緻密な手の込んだものです。山頂からの

眺めはすばらしく、光圀の見出す以前から人々の信仰を集めていたと思われる威容を誇っています。
(歴史民俗資料館)



▲陰陽神社本殿。狛犬は高麗系の珍しい形をしています



▲光圀筆の扁額のかかる石鳥居